

被爆証言

元金城教会牧師 宗藤 尚三

私は戦時中文字通り軍国少年として育てられました。中学生の時代は三年間呉工廠で勤労奉仕でしたが、その時私の職場は有名な戦艦大和の隣りでした。文字通り山のように大きい戦艦で、私は毎日大和とともに過ごすことになりました。私の仕事は呉湾や瀬戸内海の各地に曳航されてくる大破したり、中破したりしている戦艦や駆逐艦の修理のために、工員を船で運ぶ仕事でした。

そのため、私は次々と曳航されてくる軍艦を見て、果して日本は戦争に勝っているかどうか、大きな疑問を感じざるを得ませんでした。そして最後にはあの戦艦大和が特攻軍艦として出撃し、沖繩沖で撃沈されるものとは想像も出来ないことでした。やがて私は広島大学の学に入学生たその夏、つまり十八歳の時にあの歴史的瞬間を迎えることになりました。私はあの日、あの時の一瞬を生涯絶対に忘れることはないでしょう。

の方に飛んでいくエノラ・ゲイを自宅の二階の窓から眺めていました。自宅は爆心地から一・三kmの至近距離で、私はエノラ・ゲイが南の空に消えて行ったのを確かめて、首を窓から引つ込めました。もし私が少し北の方を見ていたら、原爆がパラシュートで落ちてくるのを見たことでしょう。しかし、窓から首を引つ込めた瞬間、私は言葉では表現できないような閃光の渦の中に巻き込まれ、同時に爆風で倒壊した家の下敷きになってしまいました。そして梁やガラスを体中に浴びて、意識不明になってしまいました。どうやって倒壊した家屋から這い出してきたのか、全く記憶がありませんが、外に出て、暫くどす黒い原子雲の下で呆然としていました。その時、母が私の名を叫んでいるのを聞いて、私は母と共にすぐ近くの日赤の病院の庭に逃げ込みました。私は直撃弾を受けたとばかり思っていました。日赤の中はすでに幽霊のような被爆者で混乱しており、私も力が尽きたのか、そのまま意識を失って夕方まで日赤の庭で放射能を浴び続けて倒れ

ていました。後日、私が白血病になったのは当然のことでしょう。夕方、周りが火災になり、私たちは危険なので外に追い出され、私と母は一km離れた宇品という港にたどり着き、そこから小船に乗せられて島の島という小さい島に運ばれました。そこは明治以来、陸軍の検疫所のある島として有名で、すべて中国や南方から帰還した兵士や軍馬が検疫をうける重要な軍港でもあります。そこに約一万五千人の被爆者が収容されました。そこで私はこの世の地獄のような経験をすることになります。記録によると、四日目に五千人分のすべての医療品や麻酔薬は皆無となり、麻酔なしに多くの被爆者の手足は切断されました。当時の院長は「あの時の断末魔のような悲鳴が、いまだに私の耳から離れない」と証言しておられます。その時の衛生兵の治療はただガラスを切開した出すだけだったようです。

私の治療もただ体中に突きささつていたガラスをメスで取り出すだけでした。約二十個のガラスが切開されましたが、現在も医者から腕に数個のガラスが残っていると言われています。部屋の中は足の踏み場もない位一杯の被爆者でしたが、真夏であり、部屋の中は死臭でむせかえり、死体からは蛆が無数に湧いていました。しかし焼くための薪もなく、死体はいつまでもそのまま放置され、私たちは死体をまたいで往來するような状態でした。私は気がつかなくなつたのですが、証言によると、私たちの数百メートル先では畑に沢山の穴を掘り、その中に夫々六十人から七十人の死体を纏めて、穴に投げ込んでいったそうです。それでも死体を処分出来ず、丘の約二十メートルの深さの沢山の避難壕の中に死体を詰め込んだそうです。死臭に加え、死体の腹の中に貯まったガスの悪臭のために、衛生兵は大変でした。そして死者をまるで汚物のように物干し竿で奥に押し込んでいったそうです。このようにして、数千人の死体が葬られたのですが、状況は異なりますが、まさにそれは小さなアウシュビッツと言つてよいでしょう。戦後、この島から次々と白骨が掘り出される度に、もしかしたら自分の骨ではと錯覚する位、それは他人事とは思えないのです。

約一週間、島の島に滞在していましたが、何の治療もされないの、ひとり船で広島に帰り、自分の家が全焼しているのを見届けて疎開地の庄原に帰りました。そこで私は終戦

の詔勅のことばを聞きましたが、何か戦争の呪縛から解放されたようなほつとした感じでした。

しかし体調が悪く、庄原にある日赤で診察してもらいました。そこで白血球が八〇〇という異常に減少している急性白血病という診断でした。それは現代の医学では死を意味するくらいの数値なのですが、その後私は奇跡的に九死に一生をえて、今日まで生かされています。なぜ私はあの時死ななかつたのか、自分は何のために生かされているのか、ということがその後の私の人生の課題になって行ったことは言うまでもありません。

戦後、私は精神的にも肉体的にもどん底の状態で生の意味を問い続けました。やがて焼け跡にバラック建ての古本屋が店を出すようになり、私は思想書を読みあさりました。

私にとって叔父である倉田百三の「出家とその弟子」「愛と認識との出発」は私の魂に大きな影響を与えることになりました。特に、後書からキリスト教の愛について深く教えられ、また西田幾太郎の「善の研究」から、道徳を超えた宗教の世界について、初めて目を開かれることとなりました。さらに神と人間の質的断絶を説くキエルケゴールの実存哲学

やバルトの神学に傾倒するようになり、そして私はキリストと出会い、キリスト者になることを決意しました。そのことは同時に、私が専攻していた応用化学の道を断つて、全く新しい人生を選ぶことでした。私はい間もなく広島大学を中退し、東神大に入り、牧師への道を歩むことになりました。東神大の修士論文のテーマが「パウロにおける罪の理解」というものであったのも偶然ではありません。それは、私があの戦争で経験した人間の計り知れない罪悪とその悲惨な経験が原点になると言えるでしょう。

同時に私の心を捉えたものは、日本と全く同じ状況にありながら、ドイツの教会はヒットラーの独裁主義に抵抗して、教会闘争をしたことです。礼拝で話したバルメン宣言はその出発点になるわけです。私は金城教会の副牧師でしたが、アメリカの神学校に留学、その修士論文は「カール・バルトにおける教会と国家」というもので、ここで私は教会の社会的責任の神学的な根拠を学びました。私の五十年に及ぶ牧師としての歩みの原点は、この二つの修士論文、つまり人間の罪と赦しの問題と赦された者の社会的使命は何か、ということに尽きるでしょう。

私は生涯被爆牧師としての使命は何かということを問うてきました。あの悲惨なホロコーストを風化させないように、戦争による犠牲者の死が無駄死になることなく、真に世界の平和の礎となるようにという願いを込めて宣教して来しました。

私は礼拝で話したように、あの原爆の背後には日本軍国主義による大きな過ちがあり、二度と同じ過ちを繰り返してはなりません。同時にアメリカもまた、原爆投下を正当化するのではなく、神の前に謙虚に立つて、反省し、懺悔しなくてはならない、と思います。

現在世界は核兵器が平和の守護神であるかのように、核兵器があるから戦争は抑止されていると信じています。しかし、昨年から、キッシンジャーを中心として多くの米欧の高官たちの「非核の世界を」という提言が真剣に取り上げられるようになってきました。つまり、核抑止力の有効性が疑問になる一方、むしろ核拡散の危険が増大してきているという事です。オバマ大統領候補も「核兵器全廃という目標を核政策の中心にすえる」と言っていますし、イギリスでもトライデント潜水艦の原爆の廃止について論争が始まっています。広島市長は「核兵器は廃絶

されることにだけ意味がある」と言い、核廃絶を求める声は人類の多数派であることを明言しています。人間は如何なる大義名分をもつても、核兵器を使用することは出来ません。核戦争には勝者も敗者もありません。それは人類の破滅でしかないからです。

九・一一の同時多発テロ以来、世界はテロ対策に追われ、目には目を、憎しみには憎しみを、暴力には暴力をいう増悪と復讐の連鎖が繰り返されています。イラクも全く泥沼状態に陥っています。

ニューヨークの倒壊したセンターの跡地に「リメンバー二〇〇一・九・一一」という碑が建っているそうです。リメンバーといえば、私たちはすぐ「リメンバー・パールハーバー」という言葉を思い起こします。アメリカ人はこの言葉を合言葉にして士気を鼓舞させながら太平洋戦争に突入していきました。このリメンバーという言葉には「やられたらやりかえせ」「いまにみている」という復讐を鼓吹する響きがあります。事実、ブッシュ大統領はアフガン、ニスタンやイラクに対して、徹底的な報復をしました。しかしテロを撲滅できないどころか、かえってテロを世界に拡散させたといっても良い

でしよう。しかし私たちは決して「リメンバー・ヒロシマ」とは言いません。私たちは「ノー・モア・ヒロシマ」と叫びます。つまり私たちの目指しているものは、報復の連鎖ではなく、二度と同じ暴力を使わないということを知り、人類に求めているのです。憲法九条はまさに非暴力・非武装のみが二十一世紀の核時代の国際的紛争を解決する唯一の道であることを世界に示しているのです。

このような暴力の連鎖の中で、ニューヨークにおいて「平和な明日を目指す九・一一遺族の会」というものが結成され、紛争の非暴力による解決を目指す国際的なネットワークを設立して平和活動がなされています。

ます。彼らは九・一一の遺族でありながら、ブッシュ大統領の報復攻撃に反対し、アフガニスタンの空爆の被災者を訪ねて苦しみを分かち合い、またヒロシマの被爆者とも何度も交流して、二度とこのような悲劇が繰り返されないように運動しています。

平和の問題は教会という組織の中でも大変困難な厳しい問題です。勿論教会として平和のために何かをすることもありますが、私たち一人ひとりが教会の生きた枝として、それぞれの置かれた場所で、教会を背負っているという自覚をもって、自分の出来ることをしっかりとやっています。いけばよいのではないかと思っています。